
一つの儂い花

閃光広里

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

一つの儂い花

【Nコード】

N4639T

【作者名】

閃光広里

【あらすじ】

花粉症に悩む鈴木翔一と転校生の長谷川沙紀の恋のお話

『先月の強盗殺人事件ですが、長谷川氏が自首出頭しました』

ニユースを右から左へ受け流しながらフレンチトーストをかじる。桜と共に花粉が飛び散る四月、俺は食べ終え、パンの粉が乗った皿を片付けながら花粉の被害を受けていた。

「ヘックション！ うつつ、鼻水があ……」

垂れ流した鼻水をティッシュで拭きとる。テレビを見ると、星座占いがやっていた。

*

桜が咲き乱れ、俺の花の中も大いに乱れていた。

「ヘックション！ ずずつ、気持ち悪っ」

マスクしてるにも関わらず、鼻は洪水、目は無性にかゆい、最悪だった。

桜を見て楽しむやつらが理解できない。

杉ほどではないかもしれないが、あんなに花粉をまき散らし、毛虫を繁殖させる木なんだぞ？

「……ん？」

目の前に見慣れない顔を見かけた。

俺が通う制服を着ているが……上級生か下級生かな？

まっすぐに伸びた長い黒髪、風でチラッと見える彼女の横顔。整った顔立ちで、思わず見とれてしまう。

「……………」

「あ……………」

俺の視線に気づいたのか、目が合ってしまった。

「あの……………なにか用ですか？」

「い、いや、特には……………」

「そうですか」

そしてなにもなかったかのように桜を見つめていた。

「……………桜、好きなんですか？」

「え？」

「だって、通学しないで桜を見るなんて、俺なんて、花粉が辛くて

……………」

「花粉症なんですか？」

「うん。この時期は本当に辛いんですよ」

「桜、嫌い？」

「え、そうだな……………見る分には好きだけど……………」

「そうですか。私は、好きです、桜……………」

この人を見てると、心が温かくなる。
なぜだかはわからない。

「あの、あなたの名前は……………」

「え、俺は鈴木翔一。君は？」

「私は長谷川沙紀」

「学校、遅れないようにね、長谷川さん」
「うん、わかった」

長谷川さんと別れ、学校を目指して歩き始めた。
またどこかで会えるかな、と思いながら。

*

自分の机にカバンを置き、席につく。
クラス替えて知らない顔が多く、話しかけるのがためらわれる。
ポーツとしてるとチャイムが鳴り、担任であるう教師がやってくる。

「全員いるか？ 体育館に行く前に、転校生の紹介をする。入っていいぞ」

転校生と聞いて少しざわめく教室内に黒髪の少女が入ってくる。
俺はその子の顔を見て思い出す。

「長谷川沙紀です。よろしくお願いします」

桜を見ていた子だ……。

「仲良くしてやってくれ。じゃあ体育館に向かっぞ」

*

始業式も無難に終わり、休憩時間になる。
話題は転校生についてだが……。

「長谷川ねえ……なんか引つかかるのよ」

「そうかな？」

「そうだよ、今日のニュース見た？」

「長谷川が自首したってやつ？」

「そうそう、その長谷川の娘って、なんらかの理由で通ってた高校を転校したんだって」

「え、転校……もしかして」

どうも違う意味で盛り上がっているな……。

「ねえねえ長谷川さん。犯人の長谷川となんか関係ある？」

女子生徒の問いに困惑する長谷川さん。

「え……ないですよ」

「ふん、そう……」

女子生徒は謎の笑みを残して長谷川さんから離れるのであった。

*

次の日、いつも通りに登校すると、教室内は異様な空気が漂っていた。

「……」

長谷川さんが自分の席の前で茫然と立ち尽くしていた。

「どづかしたの……!?!?」

机にチョークで落書きされていた。

それだけならまだよかったのに、長谷川さんについての暴言がびっしりと書かれていた。

「な、なんだよこれ……」

「……」

長谷川さんは無言で雑巾を取ってきたかと思うと、落書きを消しにはいる。

俺もカバンを置いて急いで雑巾を手に持ち、机を磨く。

「まったく、一体誰が……」

「……」

長谷川さんは表情を変えることなく落書きを消した。

俺は雑巾を片付けながら周りの生徒を見てみると、一人の女生徒に目が止まった。

「ふふっ……」

昨日長谷川さんに謎の笑みを見せた女生徒で、名前は確か『佐々原実里』だったな。

多分この人がやったんだと思いつつ自分の席に戻った。

*

放課後になり、俺は長谷川さんに声をかけた。

「長谷川さん、今空いてる？」

「え、はい、空いてますけど」

「じゃあさ、一緒に帰らない？」

「私とですか？ 構わないですけど……」

二人で教室を出る。

出ていく間に佐々原がこちらを見ていた。

俺達は特に会話をすることなく桜舞い散る並木道を歩いていった。

そして、俺と長谷川さんが初めて会ったあの場所に着くと、閉じていた口を開いた。

「長谷川さん、今朝のことなんだけど……なんとも思わなかったの？」

「……特になにも、子供がやることをこの歳になってやるなんて、滑稽なことですし……」

そう言う長谷川さんだが、かなり気にしてるようだ。

「でも、なんでいじめるんだろ……」

「……私が、犯人の娘だからではないかな……」

「え、犯人の娘？」

「あなたもニュースで知ってるでしょ、長谷川が自首出頭したって」

「あ〜なんかそんなニュースあったね」

「その娘が私なの……」

「それだけの理由で……」

「多分誰かが調べたんだと思う、私が犯人の娘だと……」

「長谷川さん……長谷川さんはこのままでいいの？」

「……よくないよ、でも事実だから」

長谷川さんは俺に笑いかけていたが、瞳の奥がうるんでいた。

「……そっか。……あ、俺ノート忘れたかも」

俺はカバンをあさるフリをする。

「確か宿題あったね。ゴメン、先帰ってて」
「は、はい……」

俺は学校にきびすを返し、教室に向かった。

学校では、部活動で賑わっていた。

自分の教室の前に着き、中の様子を覗いてみる。

佐々原が長谷川さんの机の前でなにか作業をしていた。

俺は気づかれないように教室の中に入り、なにをしてるか覗き込む。

そこには、白いチョークで落書きされた机だった。

「……なにやってるのさ？」
「え、なっ!？」

慌てて机を隠すように立ち上がる佐々原。

「な、なんでいるの？」

「なんでって、俺はノートを忘れたからとりに来たんだけど」

そう言いながら自分の机からノートを取り出す。

「あつたあつた」

「……」
「……ところで、佐々原さんはここでなにをしてるのかな？」
「な、なにつて……」

「佐々原さんの席は一番端っこだったよね？ それにここって長谷川さんの席だし……その手に持ったチョークもなに？」

「は、長谷川さんの席の近くにチヨークが落ちてたから拾っただけで……」
「じゃあその落書きはなんですか？」
「くっ……」

言い訳を考える佐々原さんに、俺はチヨークを奪つ。

「……だったら今から君の机に落書きしてやるうか？」

「え、あ……」

「それも暴言たつぷりの……」

「や、やってみなさいよ！ そんなことするなら、先生に言っからね！」

「言えばいいだろ、言ったら俺が君がやってきたことを全部言っけど」

「っ、証拠もなしに……」

「今、この場にいることが証拠だよ。下校時間なのに誰もいない教室で君が一人でいること自体が不自然だからね」

「……」

両者睨み合う中、教室内に誰かが入ってくる。

「はあ、はあ……」

肩で息をしていた長谷川さんだった。

「……ちっ」

佐々原さんは小さく舌打ちして教室から出て行った。

「……えっと、おせっかい、だったかな？」

「いえ……そんなことないです」
「そう……とりあえず、落書きを消さないとな」
「そうですね」

*

落書きを消し、二人で下校する。
話すことがなかったというより、隣に長谷川さんがいるだけなのに緊張していた。

横目で長谷川さんを見ると、整った顔立ちにやはり見とれてしま
う。

「……なにかついてますか？」

「え！ あ、いや、なんでもないです……」

顔が熱くなるのを自覚し、俯く。

そして、俯く俺に見せるように差し出す一枚の桜の花びら。

「え……」

「受け取ってください、舞ってた花びらを取りましたから、キレイ
ですよ」

「あ、ありがとう……」

花びらを受け取り、長谷川さんを見る。

長谷川さんの頬が微かに赤らんでいた。

「……私ね、お父さんに一度だけ怒られたことがあるんです」
「え？」

「小さい時に、公園に咲いていた小さな桜の枝を折って持って帰った
んです」

そう言いながら舞い散る桜を見つめる長谷川さん。

「親に自慢したら、お父さんにいきなり叩かれまして……」なんて
ことしてるんだ!』って」

「なにか悪いことでもしたんですか?」

「なんでも、桜の木の枝を折ると、折ったところから病気の元となる菌が侵入するみたいです」

「へえ……」

「いままで怒ることがなかったお父さんが、あの時だけは怒って……最初は意味が分からず泣いてましたけど。少し経ってから、桜が好きになりました」

「どうして?」

「お父さんも桜が大好きだからです」

桜の木をまつすぐに見つめる長谷川さんの瞳は、曇りなく、清々しかった。

そして、さつきから早く感じる胸の鼓動の意味を理解した。

「……長谷川さん」

「はい?」

「……好きです」

「え!?!」

こちらに顔を向ける長谷川さんの頬は、さつきよりも赤く染まっていた。

「長谷川さんのこと、好きになってしまいました。だから……いきなりなんです、俺と……付き合ってくださいませんか?」

一際大きな風が吹き、桜の花びらが大きく舞う。
その舞いは、まるで長谷川さんを包み込むかのようだった。
そして、長谷川さんは、俺に優しく笑みを見せるのであった。

【終わり】

(後書き)

「二次元彼女とリアル彼女」に引き続き、サークルに投稿しようか
としてる作品です。

今回は主人公にもちゃんと名前がありますし、「TRUE LOVE
E」などのキャラとはまったく関係ないオリジナルキャラ構成です。

大体として、原稿用紙十枚分(一枚四百字)の制約があつて、注意
して書いてみましたが、やはりオーバーしてしまつたオチです(汗)

十枚つて、意外と難しいですね

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になるうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能たんのうしてください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n4639t/>

一つの儂い花

2011年7月6日11時46分発行